

そうび



# のアトリエ

木のこと 木のもの  
萬ず相談承り處



2000  
夏 号  
vol. 8

◆編集・発行  
株式会社 創美  
川越市元町2-1-1  
Tel.0492-23-0258  
Fax.0492-23-0204

内容 (特集)

◇トピックス

「木と人と食と」

あいうえお II

◇街を歩く

薬師さま

◇人 (名工)

込山祐司氏

◇木と樹の話

オノオレカンバ

人と街にこだわった店創りを進めて30年、「木と樹」に戻り、「木」の商道具、「木」の生活具等、自然を大切にし、ゆたかな「木」と人の暮らしを見つめます。

・「木」による商品の紹介・頒布・インテリア・

工芸品製作・商いの店設計施工

・個展・ギャラリー・開発サポート

・人にあわせた呼吸する住まい造り・設計施工

・「木」の情報・「木」の知識の提供・イベント・

セミナーの開催

<http://www.kawagoe.com/soubi/> Eメール [soubi@wc4.so-net.ne.jp](mailto:soubi@wc4.so-net.ne.jp)

## 「木と人と食と」 あ・い・う・え・お・II

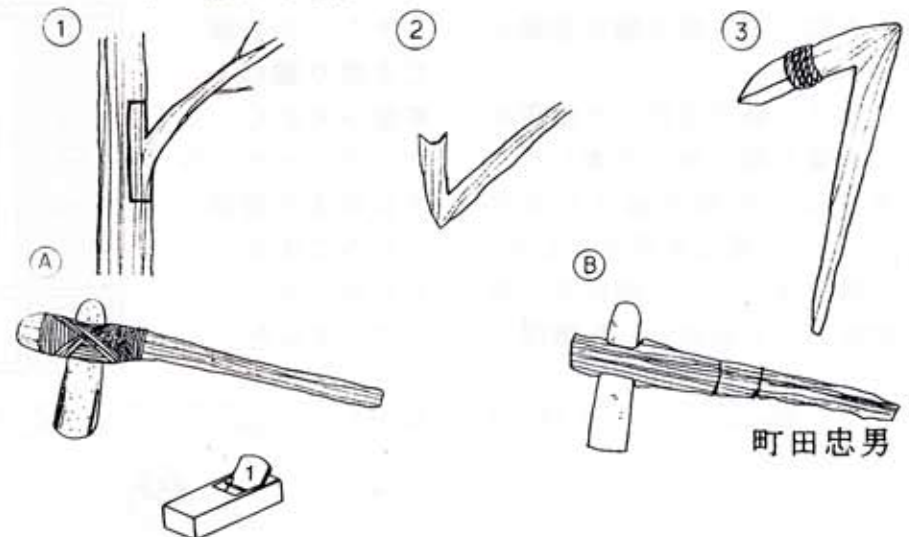
昨年 青森県「山内丸山遺跡」に出かけ BC. 3000年の古代人が素晴らしい智恵と技術を持って生活していた事を目の当たりにし、改めて「木」と「人」の関わり自然との共生を学びました。採取及び狩猟が主食料の時代、栄養価が高く効率の良いクリの実には縄文人が好んで食べたと言われておりますが、収穫量を上げる為元来ナラ、クヌギの森だったこの地を伐採し集落の周りに積極的に植樹された跡が見られます。又、日本の原産ではないヒョウタン、ゴボウ等の種子も発見されており栽培も行われていたと推測されます。加えて眼前には外海より暖流寒流が流れ込み、魚貝類の豊富な陸奥湾が拡がり人々は丸木舟を巧みに操り漁を

行い網も用いられていたと思われれます。漁獲量も多く保存にも工夫がなされていたとはいえ当時の加工には限度があり、ひるがえって考えると縄文人は鮮度の高い食生活のグルメであったでしょう。

住居には水分に強い「栗の木」が使われ高床式の建物の柱は防腐を目的に底部を焼き焦がした跡が見られる。直径約1mの大木が縄文尺と言われ

る(35cmの倍数)4.2m間隔に建てられていたのは驚きです。加工に用いたと思われる精巧な石斧も出土しておりますが、どの様な方法でこの大木を伐採、運搬、建築していたのか。

縄文人の優れた技術と智恵には大なるロマンを抱きます。(ちなみに縄文尺は腕の長さとも……!!)



町田忠男





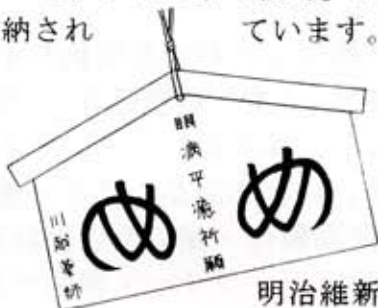
## 街を歩く——薬師さま

「川越のシンボルは？」と問うと、十中八九、答えは「時の鐘」。しかしその時の鐘を神門に据える薬師神社については、あまり知られていません。

江戸時代の初め、月九齋市（毎月2,6,9のつく日で月9回たつ市）の神として崇められておりましたが、市場発展に伴い元和9（1623）年、時の城主酒井備後守が現在の幸町（旧、多賀町）へ遷座を決定。瑞光山医王院常蓮寺の薬師堂と称しました。

城主の意志があったのでしょうか、移転先は「全体此処川越の中央にして四方への釣合甲乙無し」（川越素麺）という記述に見られるとおり、市街地の中心部です。その為、明治26年の川越大火にも遭遇しておりますが、翌年市内でもいち早く、珍しい土蔵造りで再建されました。本尊の薬師如来立像は、東大寺大仏建立で有名な行基

作と伝えられ、特に眼病に靈験あらたか。境内では沢山の「むかじめの字の絵馬」が奉納されています。



明治維新の神仏分離によって薬師神社と改称しますが、今も変わらず信仰を集めています。

現在はひっそりとしたたたずまいですが、一步通りに行くと土産物屋や名物焼きだんごのこうばしい香りが漂い、その賑わいは往時の九齋市を彷彿とさせるものでした。

訪れた午後、境内で遊ぶ子供達の姿がありました。

目の神様と慕われる薬師神社は、蔵造りの街並みを見渡す時の鐘と共に、これからも川越を見守ってゆくことでしょう。 木村志乃



三芳野名勝図繪

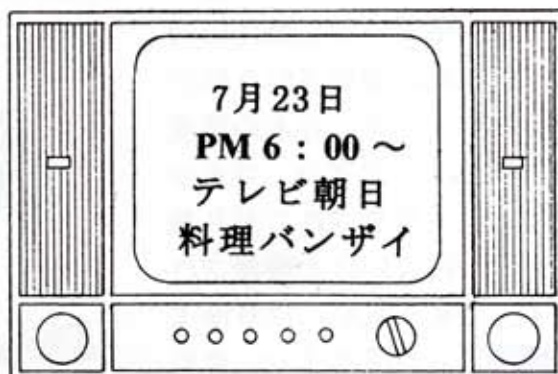
## ぜひ見てね!!

人気のごま當り器が登場します。

先日上條恒彦氏より愛用のごま當り器を使った楽しく、美味しい料理を紹介しますよ、とのお電話を頂きました。

収録後、司会の滝田栄、高樹沙耶氏を始めとした調理

スタッフの皆様、ごま當り器の要望が大きく、プロデューサーの水口氏より是非にとのご注文ありがとうございました。



私達もその日がくるのをワクワクしながらまっています







# 込山祐司氏 プラム工芸

## オノオレカンバに惚れ込んで20年

込山氏は岩手県二戸市の工芸家で、'81年「晴耕雨読」の生活に憧れ、神奈川から移り住み、雪深い冬の仕事として、木工クラフトを始めたのが、プラム工芸の始まりです。

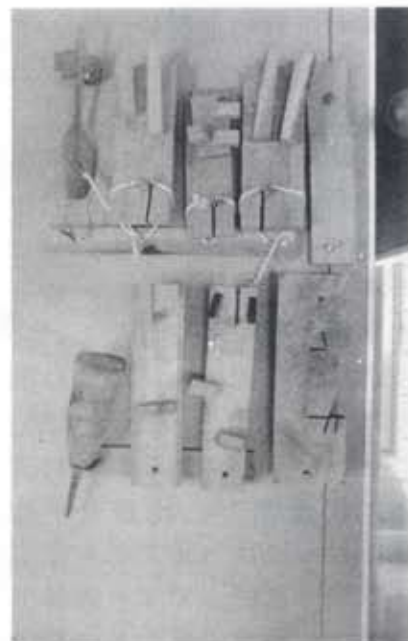
氏が主に使用するのは、オノオレカンバで、この材に出合ったのは工芸技術の習得に打ち込んでいた頃、ソロバン珠を作っている工場を見学した折り、その木目、質感に惚れ込み以来オノオレカンバにこだわり続けています。

氏は、82年、全日本中小企業見本市で、優秀賞を受賞。数々のクラフト展に入選しています。又、日本橋三越、大丸、松屋などで、個展を開き、機能を追求した独創的なフォルムは、美しい曲線を見せ、好評を博しています。

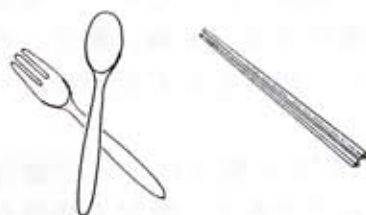
氏の知識や経験を活かした多種多様な治具の開発は女性や高齢者の方々にも気軽に働いて頂けるようになり、工程ごとの分担作業と流れ作業を実現することが出来ました。これにより卓越したデザインの製品を規格化し、品質の安定化もはかり、コストダウンをも可能にしています。又物作りの基本である人づくりを大切に、地域の交流活動などには積極的に参加し、地域に根ざした数居の低い工房づくりを進めています。

氏は95年、ショールームを開設。二戸に行く機会がありましたら、是非一度ご覧になってみてはいかがでしょうか。

小峰春彦



多種多様な治具



### ひととき

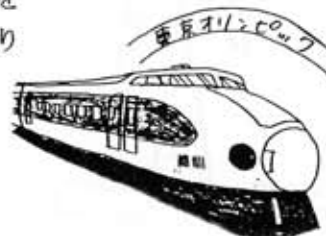
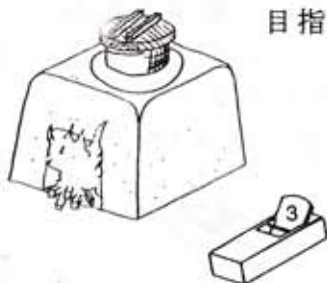
夏休みを目前にして戸田市、横浜市の博物館さんよりむかしの生活---昭和30年代の家庭、学校、遊び等の展示製作のお仕事を頂きました。

昭和30年代、そこにはまだ椋林や螢の飛び交う小川、

泥や土の匂い、薪を焚く音等自然と向き合って生活し、助け合って生きる人達がいきました。より豊かな社会を目指して走り

続けた40年間。私達が手にしたものや失ったものは何だったのでしょ。

町田初枝







## 木と樹の話 — オノオレカンバ

斧が折れる程堅いことから名付けられたこの木、斧折れ樺（別名・アズサミネバリ <梓峰樺>）は北上山地から長野県の太平洋側にまばらに分布する落葉高木です。特に標高 500M 以上の山地の岩石地や急斜面に多く自生し、その過酷な環境の為に成長は極めて遅く、1mm 育つのに 3 年もかかるとか。それ故材質は大変緻密で、比重も平均 0.94 と水に沈む程であり国産材で最も重い木です。抜群の耐久性と重さを生かして昔は馬そりや船の櫂、木型、台などに利用され、近年でも算盤の珠や楽器、木魚、象牙の代わりに印台として用いられています。

あまりの堅さにノミや鉋など刃が立たず、製材も特殊な刃を使うなど、加工には苦勞があるものの、仕上がり面は極めて滑らか。色は透明感のある褐色で、きらめく光沢は虎目石を思わせる大変美しい材であり、弓などの宝物に

加工され古来より朝廷に献上されていたとも言われます。

そうび木のアトリエでは、重さを利用しゴルフクラブの形を思わせる肩叩きや、靴篋しゃもじ、箸、スプーンなどを取り扱っております。

稀少で貴重な木になって来た為、ロスが多く出るとの事で人気商品であった長さ 70 cm 程もある流線形の美しい靴篋が現在作られていないのはとても残念です。

オノオレならではのスペースの手触りを是非お楽しみ下さい。

松岡百合子  
参考資料  
㈲ プラム工芸



### 編集子

4 月、当社にも新入社員が入社しました。ピタッと納まる抽斗、そんな家具を作りたいと木工職人を志した木村志乃さんと、施主さんから（いいものが出来てありがとう）の言葉が聞きたくて

建築士を目指した児玉雄太郎君です。

明日の創美を担う若き二人は今日も社内に新たな「風」を吹き込んで頑張っています。今後も通信を応援して下さい。読者の皆様、お便りの風お待ちしております。

野島良子

文責 町田忠男